

当面の革命の性格と戦い方（修正主義との違い）

こういう経済的基礎のうえでは、ロシアにおける革命は、もちろん、不可避的にブルジョア革命である。マルクス主義のこの命題は、まったくうちやぶりえないものである。この命題をけっしてわすれてはならない。この命題を、つねにロシア革命のあらゆる経済的および政治的問題に応用することが必要である。

だが、この命題を応用する能力をもたなければならない。種々異なった階級の立場や利害についての具体的な分析が、この真理をあれこれの問題に適用するばあい、その真理の正確な意義を規定するのに役だたなければならない。しかし、プレハーノフを先頭とする右翼社会民主主義者のあいだによく見うけられるような、これとは逆の考え方、すなわち、具体的な問題にたいする回答を、わが国の革命の基本的性格にかんする一般的真理の単なる論理的展開のうちにもとめようとする志向は、マルクス主義の卑俗化であり、弁証法的唯物論にたいするまったくの愚弄である。たとえば、この革命の性格にかんする一般的な真理から、この革命では「ブルジョアジー」が指導的役割をもつとか、社会主義者は自由主義者を支持する必要があるとか結論するような人については、おそらくマルクスは、彼がかつてハイネから引用したことのあるつぎの一句をくりかえすことであろう。「私は龍の歯を播いた、ところが、収穫したものは蚤だった。」

注) マルクスは、ハイネがその追従者たちについてかたつたつぎの言葉をその著『カール・グリュン《フランスおよびベルギーにおける社会運動》(ダルムシュタット、1845年)、あるいは真正社会主義の史料編纂』〔ドイツ・イデオロギーⅣ〕のなかで引用している。「私は龍の歯を播いた、ところが、収穫したものは蚤だった」。

第三巻 「ロシアにおける資本主義の発展」 第2版の序文 P10 (1907年7月)

コメント

当面の日本革命は、新しい人民の民主主義革命である。「この命題を応用する能力をもたなければならない。種々異なった階級の立場や利害についての具体的な分析が、この真理をあれこれの問題に適用するばあい、その真理の正確な意義を規定するのに役だたなければならない。」つまり、現在の日本の諸階級の経済的利益を、つねに、正確に分析し、その政治的代弁者である政党の階級的性格をリアルにつかみ、それらの階級と共通する要求・課題は何か、彼らとの違いは何かを明確にし、ことあるごとに、労働者に提起しなければならない。そのことを忘れると、革命的民主主義者がブルジョア民主主義者になってしまう。労働者階級の階級的自覚をもった主体的な運動なしの課題の達成は労働者を眠りこませるだけである。